12　　の家 　文法　助詞③　終助詞・間投助詞

の節句を前にした五月四日、狭衣は、屋根に菖蒲の花をいた（挿した）家々の間を車で通り抜けている。そしてその様子を女性たちが夢中になって見ている。

扇を笛に吹き給へる夕映えの御かたち、まことに光るやうなるを、に集まりて見奉りめづる人々ありけり。御車など、今は大人しくなり給へれど、御供のなどはいと若うをかしげに㋐なべてならず見ゆるを、「①あはれ、あれが身にてだにあらばや。何事を思ふらむ」と、若き人はめでまどひて、過ぎ給ふもなほ飽かねば、軒の菖蒲を一筋引き落として急ぎ書きてはしたもののをかしげなるして、追ひて奉る。後れて走る御随身に取らせて帰るを、「いづこよりとか申さむ。㋑やがて御車に参り給へ」とてとらへつ。ご覧ずれば、

　しらぬまのあやめはそれと見えずともがもとは過ぎずもあらなむ

とぞ書きたる。「②いかなるすき者ならむ」とほほゑみて問はせ給へど、言はむやは。

語注

半蔀＝戸の一種。

随身＝貴族の外出の際、警護のため従った供の者。

若き人＝ここでは、若い女性を指す。

しらぬまの…＝「しらぬま」は「知ら」と「白」の。また「あやめ」は「」と「」の掛詞。

【原文】

扇を笛に吹き給へる夕映えの御かたち、まことに光るやうなるを、に集まりて見奉りめづる人々ありけり。御車など、今は大人しくなり給へれど、御供のなどはいと若うをかしげになべてならず見ゆるを、「あはれ、あれが身にてだにあらばや。何事を思ふらむ」と、若き人はめでまどひて、過ぎ給ふもなほ飽かねば、軒の菖蒲を一筋引き落として急ぎ書きてはしたもののをかしげなるして、追ひて奉る。後れて走る御随身に取らせて帰るを、「いづこよりとか申さむ。やがて御車に参り給へ」とてとらへつ。ご覧ずれば、

　しらぬまのあやめはそれと見えずともがもとは過ぎずもあらなむ

とぞ書きたる。「いかなるすき者ならむ」とほほゑみて問はせ給へど、言はむやは。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

狭衣の様子はまるで〔　　　　〕ようである。〔　　　　〕たちの姿も若々しくはなやかで、若い女性たちはしきりに賞賛しあう。一人の女性が気をこうと、〔　　　　　　〕を一本、歌に添えて狭衣に贈った。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。（㋐は終止形でよい。）〈4点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　チェック問題　助詞③　終助詞・間投助詞

次の傍線部を現代語訳せよ。〈2点×3〉

1　君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな（後拾遺集）

2　世離れたる海面などに、はひ隠れぬかし。（源氏物語）

3　をかしの御髪や。（源氏物語）

1〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

2〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

3〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問四　傍線部①を現代語訳せよ。ただし、「あれが身」とは、狭衣の随身を指す。〈6点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問五　「若き人」が詠んだ「しらぬまの…」の和歌の解釈として最も適当なものを選べ。〈10点〉

ア　どことも知れぬ沼の菖蒲がそれと見分けがつかないように、誰とわからなくても、粗末な私の家を通り過ぎないでほしいものです。

イ　寂しい沼に咲く菖蒲が際立って美しく見えるように、粗末な宿に住む私を、どうか忘れないでいてください。

ウ　この菖蒲がどこそこの沼に生えていたものだとはわからなくても、文を送った私の住む蓬の門には、きっと見覚えがあるはずです。

エ　今日の菖蒲のように華やかなあなたが気づかなくても、私が住む粗末なこの家は、いつまでも変わらずにここにありますよ。

〔　　　〕

問六　傍線部②について、狭衣は使いの者にどのようなことを尋ねたのか。三十字以内で答えよ。〈12点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七　本文の内容に合致しないものを一つ選べ。〈8点〉

ア　周囲の家に合わせ、貧しいのに無理をして菖蒲を準備した家を目にして、狭衣は気の毒に感じた。

イ　乗り物は地味にしつらえていたが、お供の者たちの華やかさゆえに、若い女性は心を奪われた。

ウ　若い女性は狭衣の気を惹くために、急いで和歌を詠み菖蒲を添えて、彼に送った。

エ　和歌を読んだ狭衣は、女性の素性を知りたがったが、結局知ることはできなかった。

〔　　　〕

【解答】

問一　光る　随身　軒の菖蒲

問二　㋐＝並一通りでない・格別だ　㋑＝そのまま〈4点×2〉

問三　１＝長くあってほしいと思うものだなあ〈2点×3〉

２＝ひっそりと隠れてしまうものよ

３＝お髪だなあ

問四　ああ、せめてあのような身だけでもありたいものだ。〈6点〉

問五　ア〈10点〉

問六　和歌を贈ってきた主人はどのような風流人であるのかということ。（30字）〈12点〉

問七　ア〈8点〉

【現代語訳】

扇を笛に（みたてて）お吹きになっている夕日を受けた（狭衣の）お顔が、まさに光り輝くよう（に素晴らしいもの）であるのを、半蔀の近くまで集まって拝見し夢中になる女性たちがいた。御車など、今は慎ましやかにしつらえていらっしゃるが、（狭衣の）お供をしている御随身たちはとても若々しく見事な様子で並一通り（の人物）ではないように見えるので、「ああ、せめてあのような身〔＝御随身〕だけでもありたいものだ。何を思っているのだろう」と、若い女性は褒めそやし騒ぎ立て、（狭衣が）通り過ぎなさるのもやはり心残りなので、軒に挿した菖蒲を一本引き落として急いで（手紙を）書いて召し使い（の女童）で見た目が悪くない召し使いに言いつけて、後を追い申し上げ（させ）る。（狭衣の車から）おくれて走る御随身に（手紙を）受け取らせて帰るので、（御随身は）「どこから（の手紙）と（主人に）申し上げようか。そのまま御車（のところ）に参上くだされ」と言って引き留めた。（狭衣がこの手紙を）ご覧になると、

どことも知れぬ沼の菖蒲はそれと見分けがつかないが、そのように誰とわからなくても、手紙を差し上げたこれからは、蓬が生い茂るみすぼらしい私の家を通り過ぎないでいただきたいものです。

と書いている。「（この手紙の主は）どのような風流人であるのだろうか」と微笑んで尋ねなさるけれど、（召し使いの者は主人の名を）言うだろうか、いや言わないはずだ。

【補充問題】

問１　「はしたもののをかしげなるして」（４行目）を現代語訳せよ。

問２　「言はむやは」（８行目）について、

(1)　動作の主体は誰か。本文中の言葉を抜き出し、五字以内で答えよ。

(2)　現代語訳せよ。

【補充問題解答】

問１　召し使いで見た目が悪くないものに言いつけて

問２　(1)　はしたもの（５字）

　　　(2)　言うつもりだろうか、いや言うつもりはなかった。